兵庫県文化財調査報告　第287冊

淡路市所在

小　田　遺　跡

－道路改良事業（野島浦線）に伴う発掘調査報告書－

2006年3月

兵庫県教育委員会

淡路市所在

小　田　遺　跡

－道路改良事業（野島浦線）に伴う発掘調査報告書－

小田遺跡　出土遺物

例　言

1．本書は、淡路市浦（旧、津名郡東浦町浦）に所在する小田遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、（一）野島浦線道路改良工事に伴い、兵庫県淡路県民局　県土整備部　洲本土木事務所の委託を受けて、平成11年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。

3．出土品整理事業は、平成17年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区所在）および同　魚住分館（明石市魚住町所在）において実施した。なお、出土品整理事業の名称は、道路改良事業（野島浦線）に伴うものに変更されたが、本文中は、発掘調査時に呼称していた（一）野島浦線道路改良工事の名称を使用している。

4．本書で示す標高値は、東京湾平均海水準（T．P）を基とし、方位は座標北を示す。

5．本書の挿図第２図「遺跡の位置」は、東浦町都市計画図（平成14年６月作成）を使用し、挿図第３図「周辺の遺跡」は、国土地理院発行の１／25,000「明石」・「須磨」・「仮屋」・「田之代」をそれぞれ使用した。

6．土層の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』1998年版を使用した。

7．本書に掲載した遺物には、通し番号をつけており、遺物番号は本文・挿図・写真図版ともに統一している。また、土器の図版のうち、断面白抜きは土師器、黒塗りは須恵器、粗い網点は瓦器、細かい網点は磁器をそれぞれ示している。

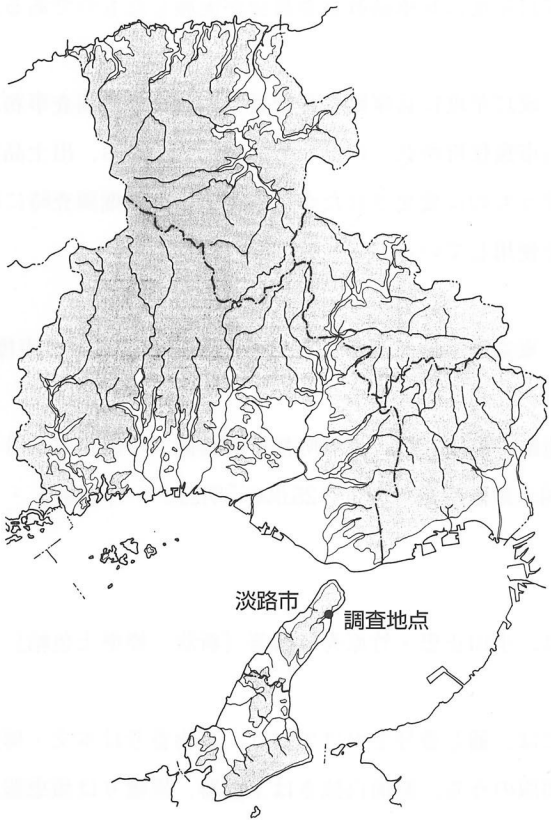
8．遺物の写真は、株式会社アコードに委託して撮影したものを使用した。

9．本書の編集は、高瀬敬子の補助を得て、仁尾一人が行い、執筆についても仁尾が行った。

10．本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。

11．発掘調査および整理作業にあたって、下記の方々・機関にご協力・ご指導をいただきました。記して感謝いたします（順不同、敬称略）。

伊藤宏幸・大石雅一（以上、淡路市教育委員会）



第１図　新市「淡路市」と遺跡の位置

本　文　目　次

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過……1

第２節　本発掘調査の経過と体制……2

第３節　整理作業の経過と体制……3

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境……4

第２節　歴史的環境……4

第３章　調査の成果

第１節　遺構……7

第２節　遺物……10

第４章　まとめ

第１節　遺構および遺物について……19

第２節　小田遺跡の範囲とその後の調査について……20

報告書抄録……22

挿　図　目　次

第１図　新市「淡路市」と遺跡の位置

第２図　遺跡の位置……1

第３図　確認調査　トレンチ配置図および
本発掘調査　調査対象地……2

第４図　淡路島の地質……4

第５図　小田遺跡の位置と周辺の遺跡……5

第６図　調査対象地および調査区……7

第７図　調査区全域図および
南壁土層断面図……8

第８図　２区　溝状遺構平・断面図……9

第９図　２区　出土遺物(1)……11

第10図　２区　出土遺物(2)……13

第11図　２区　出土遺物(3)……15

第12図　平成15・17年度
調査対象範囲および試掘坑配置図……20

写真および表目次

写真１　遺物の接合・補強状況……3

写真２　遺物の実測状況……3

第１表　遺物観察表(1)……16

第２表　遺物観察表(2)……17

第３表　遺物観察表(3)……18

巻首図版目次

巻首図版１　小田遺跡　出土遺物

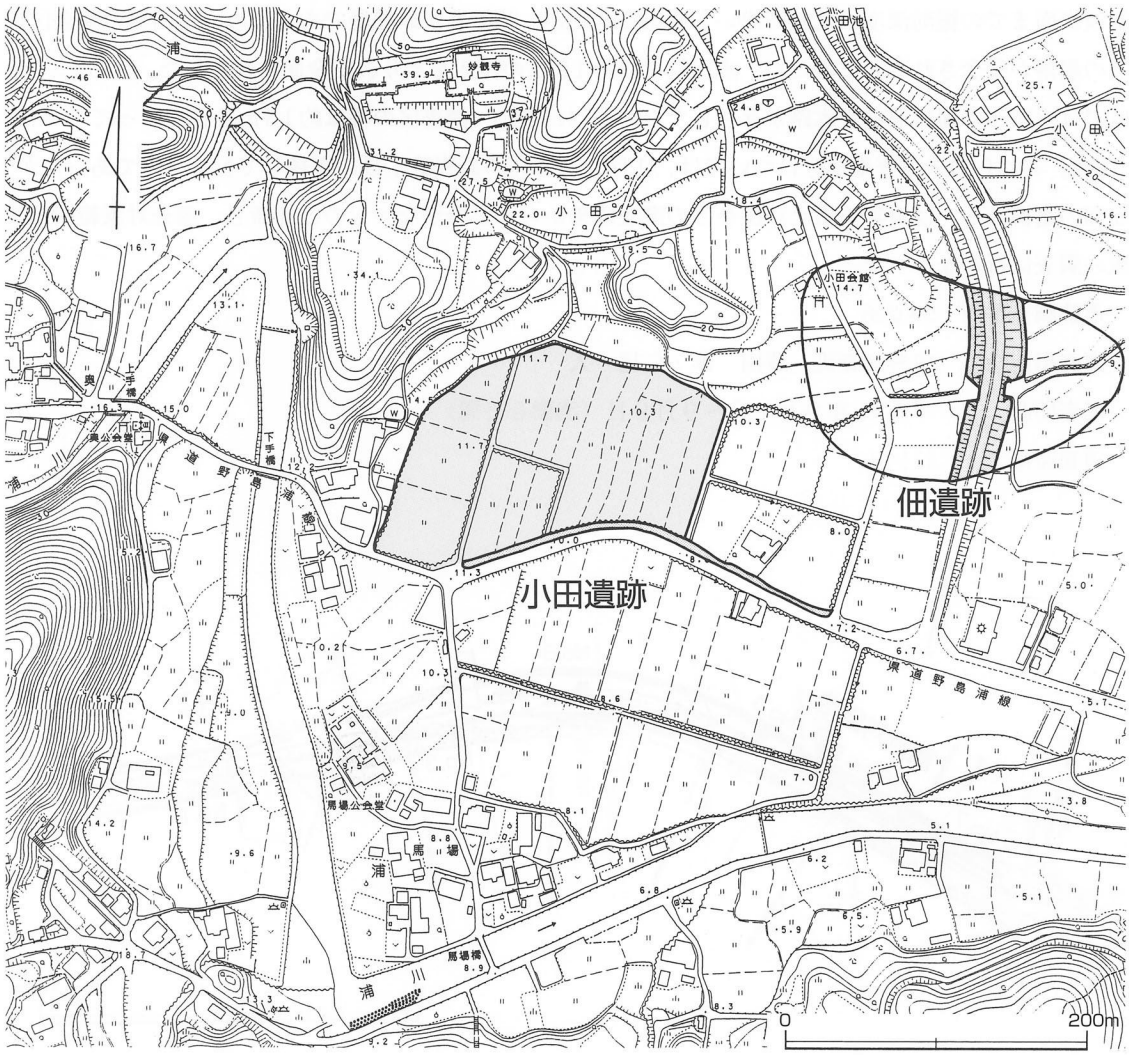
写真図版目次

写真図版１　調査前状況（西から）
１区　全景（東から）
１区　南壁土層断面（北西から）
写真図版２　２区　溝状遺構検出状況（東から）
２区　溝状遺構完掘状況（東から）
写真図版３　２区　南壁土層断面（北東から）
２区　溝状遺構土層断面（西から）
２区　溝状遺構遺物取り上げ状況（南から）
写真図版４　３区　南壁土層断面（北東から）
調査状況（西から）
小田遺跡および佃遺跡の現況（西から）
写真図版５　２区　出土遺物(1)
写真図版６　２区　出土遺物(2)
写真図版７　２区　出土遺物(3)
写真図版８　２区　出土遺物(4)
写真図版９　２区　出土遺物(5)
写真図版10　２区　出土遺物(6)

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

兵庫県の南部、瀬戸内海に浮かぶ淡路島は、島内最北端の淡路市岩屋から東海岸を走行し、洲本市から南あわじ市福良に至る国道28号線や、西の海岸線を走行する県道31号福良江井岩屋線など主要な道路は比較的交通量が多く、主要道路から山間部に入ると道幅の狭い煩雑に入り組んだ生活道路へと続いている。一般県道野島浦線（以下、野島浦線）は、淡路島を東西に結ぶ県道のうち、最も北に位置し、神戸淡路鳴門自動車道（淡路縦貫道）の東浦インターチェンジへの進入路にもなっている。明石海峡大橋の開通以来、周辺道路の交通量は増大し、野島浦線にも大型観光バスや観光客のマイカーの通行が目立つようになっている。野島浦線の大部分は、一車線道路であり、車両の通行に支障をきたす機会が増加しつつあり、歩行者の安全確保の面からも道路改良事業の早期着手が求められていた。これをうけ、平成11年度に東浦インターチェンジから中持集落の東のはずれまでの約230ｍにおよぶ範囲の道路改良が実施されることとなった。



第２図　遺跡の位置

第２節　本発掘調査の経過と体制

確認調査　（一）野島浦線道路改良工事の計画にともない、周辺地域は小田遺跡の存在が周知されていたため、平成11年６月16日～６月17日の２日間、調査対象範囲内に８ヵ所のトレンチを設定し、確認調査を実施した（第３図）。調査では、３ヵ所のトレンチ（№4・№6・№7）から中世あるいは弥生時代の土器が出土し、遺構の存在が予想された。

遺跡調査番号　990160

調査担当者　　企画調整班　山本　誠・山野慎一

調査期間　　平成11年６月16日～６月17日

調査面積　　16㎡

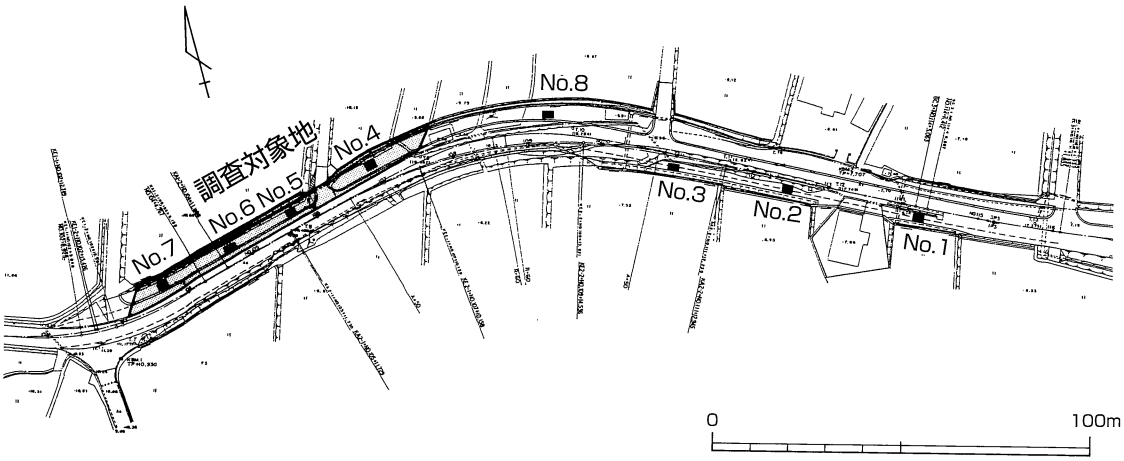
本発掘調査　確認調査の結果をうけ、平成11年９月１日～９月９日までの実働６日間、小田遺跡の本発掘調査を実施した。調査対象地は現行道路に沿った幅約４～５ｍ、延長約110ｍの範囲である（第３・６図）。調査では、調査地を横切るように耕作中の水田への通路が３ヵ所あったため、それらを除き、調査区を４つに区画し、西側から１区、２区、３区、４区と呼称した。また、確認調査の結果では、遺構検出面までの掘削深度は比較的浅いと考えられたが、基盤層が砂礫層であるため、水田側の調査区壁面の崩落が懸念された。このため、水田側では約1.5ｍの控えをとり、安全面に留意した。さらに、４区では水田との間に簡易な水路が存在したため、これを控え、調査区の幅は約1.8ｍと狭くなっている（第６図）。これらの未調査地部分については、１区から４区の調査終了後に継続して行う予定であったが、周囲の遺構あるいは遺物の出土状況などの調査成果から、必要がないものと判断し、調査対象範囲内全域の調査は行わなかった。

遺跡調査番号　990206

調査担当者　　復興調査班　藤田　淳・仁尾一人

調査期間　　平成11年９月１日～９月９日（実働６日間）

調査面積　　171㎡



第３図　確認調査　トレンチ配置図および本発掘調査　調査対象地

第３節　整理作業の経過と体制

出土品整理作業は、兵庫県淡路県民局　県土整備部　洲本土木事務所の依頼を受け、平成 17 年度にすべての作業を実施した。遺物の水洗いおよび遺物のネーミング作業は、明石市魚住町に所在する兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の魚住分館において実施し、その後、神戸市兵庫区に場所を移し、遺物の接合・補強、実測・拓本、写真撮影、遺構図補正、トレース、レイアウト、報告書印刷に至る作業を行った。

整理保存班　藤田　淳（魚住分館）
　　仁尾一人（工程管理他）
整理嘱託員　高瀬敬子
　　吉田優子・西口由紀・蔵　幾子・宮野正子・河上智晴・大仁克子・加藤裕美・早川有紀
　　高橋朋子・荻野麻衣・西谷美保
　　長谷川洋子・早川亜紀子・伊藤ミネ子・衣笠雅美・家光和子・岡井とし子

写真１　遺物の接合・補強状況

写真２　遺物の実測状況

第２章　遺跡の環境

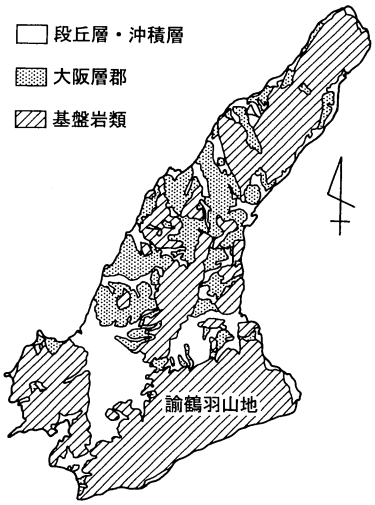
第１節　地理的環境

兵庫県の南に位置し、播磨灘・大阪湾および紀伊水道に囲まれた瀬戸内海上に浮かぶ最大の島、淡路島は周囲約 174 km、面積約 596 ㎢を測り、兵庫県土の約７％を占めている。地形的には、北部の北淡山地、中央部の先山山地とその周辺の丘陵部、西部の西淡山地、南部の和泉層群より形成される諭鶴羽山地および三原溝低地の５つに大別される。このうち、小田遺跡が所在する北部の北淡山地は、六甲山地から続く花崗岩類より形成され、四周を断層で境された地塁山地である。

淡路島は年間の平均気温・降雨量・日照時間など、農作物の生育に適しており、島内唯一のまとまった平野部である島南部の三原平野では、酪農を基幹とした水稲・野菜・たまねぎ等の多毛作が行われる兵庫県内有数の農業地域である。また、島内の約 65％を占める山地および丘陵部でも、傾斜地の耕地化が進み、いたるところで棚田や果樹園が造成されている。

兵庫県は近年の市町合併により、平成 17 年４月１日現在、28 市 32 町となったが、淡路島ではこれまでの１市 10 町から、旧津名郡の５町（淡路町・北淡町・一宮町・東浦町・津名町）が合併した北部の「淡路市」、旧三原郡４町（三原町・緑町・西淡町・南淡町）が合併した南部の「南あわじ市」、そして中央部に位置する洲本市と津名郡五色町の以上、３市１町に統合されることとなった。このうち、小田遺跡が所在する淡路市は総面積約 184 ㎢を有し、島北部の約 30％を占め、人口は約５万人を数える。

旧津名郡津名町と同東浦町との町境には標高約 522 ｍを測る妙見山が聳え、市内の中央部は南北に標高 300 ～ 500 ｍの山塊が広がっている。山塊から海岸線にむけては、標高 200 ～ 300 ｍを測る高原（丘陵）地帯が広がるが、標高 100 ｍに満たない起伏も多く、西側では播磨灘に面して海岸段丘が発達し、東側では比較的急傾斜となって大阪湾へと至っている。これらの山塊を水源に河川は東西両海岸へと注いでいるが、比較的まとまった流域を有する河川はなく、周辺には貯水用のため池が数多く点在している。小田遺跡に近接して流れる浦川は、旧東浦町では最長ながら、延長約 4.5 ㎞で大阪湾へと注いでいる。



第４図　淡路島の地質

第２節　歴史的環境

淡路島では、昭和 50 年代後半から神戸淡路鳴門自動車道（以下、淡路縦貫道）建設にともなう大規模な発掘調査が行われるようになり、旧東浦町域においても、それまでの小規模な確認調査が主流であった遺跡の調査は上記の建設事業によって佃遺跡（22　第５図の遺跡番号に対応　以下、同）・管松原遺跡（28）・藤ノ木遺跡（14）・尼ケ岡遺跡（51）・禿山遺跡（52）の発掘調査が実施されている。それ

001. 楠本下林遺跡　002. 片山遺跡　003. 丸山古墳　004. 竹の下遺跡　005. 南所遺跡
006. 湊山遺跡　007. 岩口遺跡　008. 楠本塩入遺跡　009. 飛谷遺跡　010. 平林遺跡
011. 山川遺跡　013. 井上遺跡　014. 藤ノ木遺跡　015. 平松西遺跡　016. 猪ノ尻遺跡
017. 平松遺跡　018. 萱野遺跡　019. 古茂尻遺跡　021. 白岡遺跡　022. 佃遺跡
023. 向殿館跡　024. **小田遺跡**　025. 正井館跡　026. 岸田遺跡　027. 奥遺跡
028. 管松原遺跡　029. 塩浜遺跡　030. 宮ノ本遺跡　031. 砂田遺跡　032. 一本松遺跡
033. 下坪遺跡　034. 内町遺跡　035. 並松遺跡　036. 大田遺跡　037. 引野遺跡
038. 城原遺跡　039. 今出川遺跡　040. 久留麻土居館跡　041. 大歳遺跡　042. 水木遺跡
043. 大坂遺跡　044. 行免形遺跡　045. 千本遺跡　046. 岡田館跡　047. 河内遺跡
048. 百田遺跡　049. 白山真土遺跡　050. 白山岡遺跡　051. 尼ケ岡遺跡　052. 禿山遺跡
053. 原遺跡　055. 城ノ腰城跡　066. 阿文字城跡　067. 神田遺跡

第５図　小田遺跡の位置と周辺の遺跡

らの調査成果を中心とした旧東浦町域の歴史的な環境の復元は、これまでに東浦町教育委員会によって発行（編集は津名郡町村会）されている遺跡の報告書および『東浦町史』で記載されているため、ここでは、小田遺跡と時期的に重なる中世を中心とした周辺の歴史的な環境を追ってみたい。

本州側の神戸市垂水区舞子と淡路側の淡路市岩屋とを結ぶ明石海峡大橋は、島内中央の山塊を避けるように大きく左（東）に曲がり、東海岸側の丘陵裾を北東から南西方向へほぼ直線的に走行している。小田遺跡に近接する東浦インターチェンジ付近からは、中央部の山塊を横切り、旧北淡町の西海岸方面へと大きく方向を変えていく。小田遺跡（24）は、淡路市浦（旧津名郡東浦町浦）に所在し、現在の海岸線より約1㎞内陸部に位置している。調査地周辺は標高約10ｍを測り、標高200～300ｍの丘陵裾を走行する淡路縦貫道から急な角度で傾斜した東沿岸部の比較的周囲が開けた地点に立地している。北東に隣接して、縄文時代の遺構が発掘され全国的にも著名となった佃遺跡（22）が所在している。

旧東浦町域では、中世の遺跡は約40遺跡が確認されている。小田遺跡周辺で面的な調査が行われた中世の遺跡は、上記の佃遺跡や管松原遺跡、藤ノ木遺跡の他に、ほ場整備事業にともなって確認調査が実施された猪ノ尻遺跡（16）などがある。佃遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であり、奈良時代、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての遺構も検出されている。このうち、奈良時代の二段暗文のある土師器の存在から古代には官衙などの施設が置かれていた可能性が考えられている。管松原遺跡では、中世墓と考えられる床面が赤くなっている土壙や炭を多量に含んだ楕円形の土壙が複数検出され、藤ノ木遺跡（14）では、13～14世紀代の小規模な集落跡が検出されている。また、猪ノ尻遺跡でも島内では淡路国分寺跡（南あわじ市）や下内膳遺跡（洲本市）などでしか確認されていない平安時代の緑釉陶器が出土しており、官衙あるいは寺院跡の可能性が指摘されている。この他、調査は行われていないが、小田遺跡の北側丘陵上に立地する向殿館跡（23）や正井館跡（25）などの中世城館、井上遺跡（13）や古茂尻遺跡（19）、平松西遺跡（15）などが確認されており、前者は弥生時代から中世の複合遺跡として、後者は中世の集落跡として周知されている。これら淡路北部の中世遺跡は、中世前期（12世紀後半～13世紀代）の時期のものが多く、中世後期（14～16世紀）の遺跡はあまり確認されていない状況である。また、調査された遺跡からは、東播系須恵器の椀・皿・鉢類および瓦器の椀・皿類が普遍的に出土しており、淡路南部の遺跡に比べ東播系須恵器の比率は高く、瓦器は和泉型と呼称されるものが中心である。さらに、備前焼や中国製の青磁・白磁なども出土することから、小田遺跡を含めた周辺の中世遺跡では、淡路島の地理的特徴である海上交通を通じて播磨地域と畿内地域にとどまらない、広範囲な流通が行われていたものと考えられる。

参考文献

『兵庫県大百科事典』　神戸新聞出版センター　昭和58年
『楠本下林遺跡』　東浦町教育委員会　平成9年
『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』　兵庫県教育委員会　平成9年
『佃遺跡』　兵庫県教育委員会　平成10年
『東浦町史』　東浦町史編集委員会　平成12年
『大坂遺跡　千本遺跡　行免形遺跡』　東浦町教育委員会　平成15年
『東浦町遺跡分布地図』－町内遺跡詳細分布調査報告書－　東浦町教育委員会　平成16年

第３章　調査の成果

第１節　遺構

調査の概要

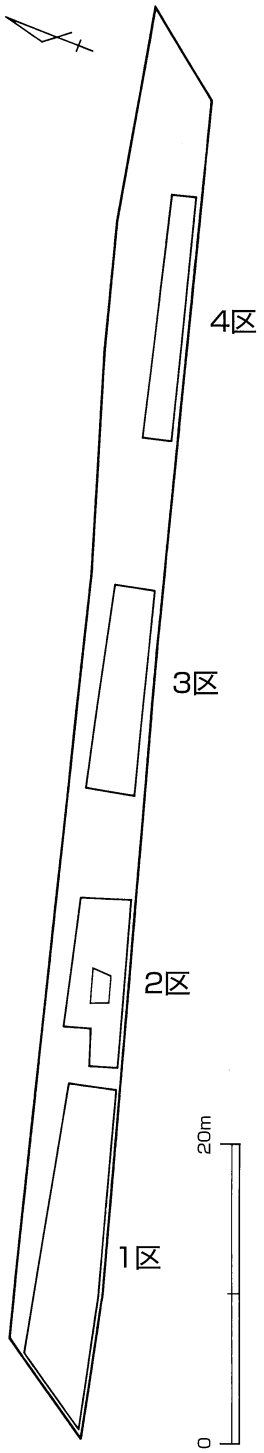
調査は、確認調査の結果を踏まえ、重機による掘削ののち、人力によって遺構および遺物の検出に留意しながら掘り下げを進めていった。調査区は４つに区画し、西側から１区、２区、３区、４区と呼称（第６図）し、調査によって生じる掘削残土は、調査対象地外へ搬出できなかったため、調査区内に仮置きし、地区毎に調査を終了したのち、埋め戻しを行った。

調査では、２区において溝状の落ち込みが検出され、中世の土師器、須恵器、瓦器などが一括して（セキスイ TS28 コンテナ　３箱）出土した他、１区および４区では遺構は確認されなかったものの、弥生土器あるいは中世の瓦器などが出土した。しかし、３区では遺構および遺物ともに発見されなかった。

１区の調査成果

１区は南辺約 23 m、北辺約 18 m、東辺約３ｍを測る台形状を呈し、調査面積は約 62 ㎡である。調査区の西端付近では、灰黄褐色の砂礫層（第７図　１区南壁土層断面６層　以下、同）の上面に厚さ約 10 ㎝のにぶい黄褐色シルト質の砂層（３層）が堆積しており、比較的安定した面が形成されていたと考えられる。しかし、にぶい黄褐色土層の上面には、旧耕土と床土が入り混じったような撹乱土が堆積しており、最上部は削平されていたと考えられる。

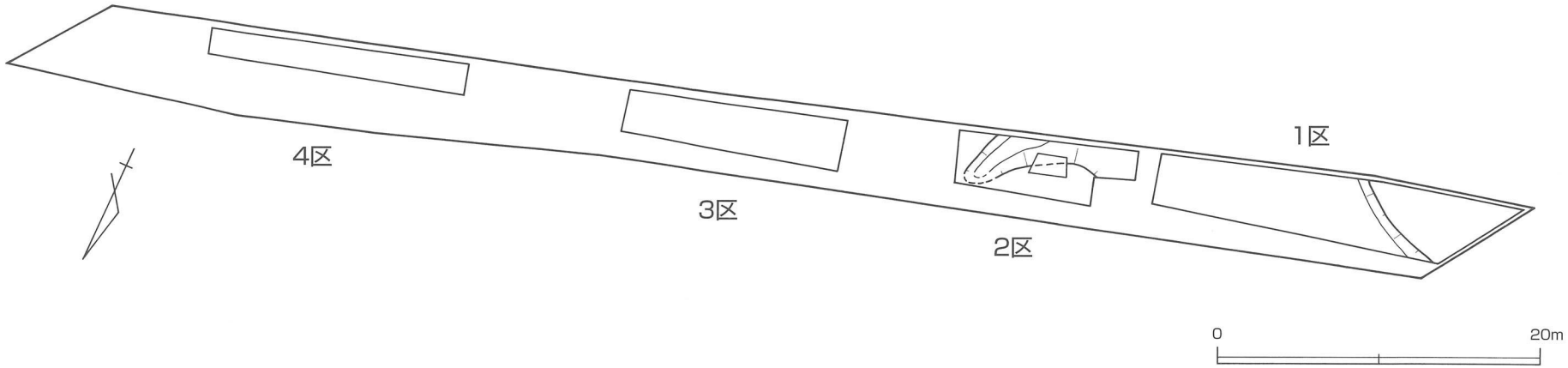
遺構は、柱穴状の浅い窪みを複数確認したが、明確な遺構は確認されなかった。西端付近以東では、撹乱土の直下に黄褐色土層（２層）が認められ、遺物包含層および遺構・遺物ともに確認されなかった（第７図）。しかし、にぶい黄褐色土層が東へわずかに傾斜し、途切れた付近の砂礫層上層より、弥生時代後期の遺物を包含する厚さ約 0.1 ～ 0.3 ｍのオリーブ黒色土層（４層）が認められた。遺物は包含層の落ち際から西側で比較的多く出土したが、東へ向かうほど減少する傾向があり、その下層は巨礫を含む砂礫層（６層）が堆積しており、遺構は確認されなかった。



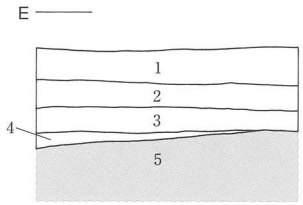
第６図　調査対象地および調査区

２区の調査成果

２区は当初、東西約 8.5 ｍ、南北約 3.5 ｍを測る範囲を調査区として設定したが、調査区の南半部より溝状の落ち込み（以下、溝状遺構）が

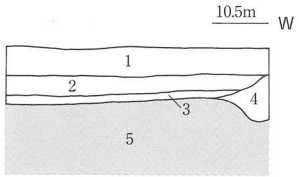


4区　南壁土層断面



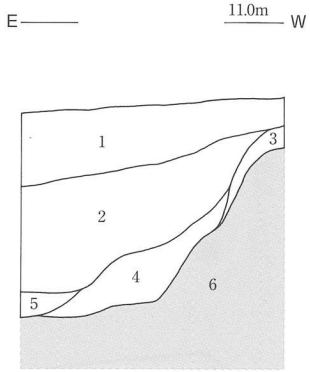
1. 耕土
2. 床土
3. 10YR4/1 褐灰色 極細砂～細砂（遺物包含層）
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂～粗砂
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂礫層
（上方に5YR3/4 暗赤褐色 細砂～粗砂を含む）

3区　南壁土層断面

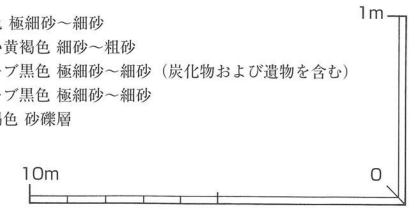


1. 耕土
2. 旧耕土
3. 床土
4. 7.5YR4/1 褐灰色 砂礫層
5. 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂（上方にマンガンを含む）

1区　南壁土層断面



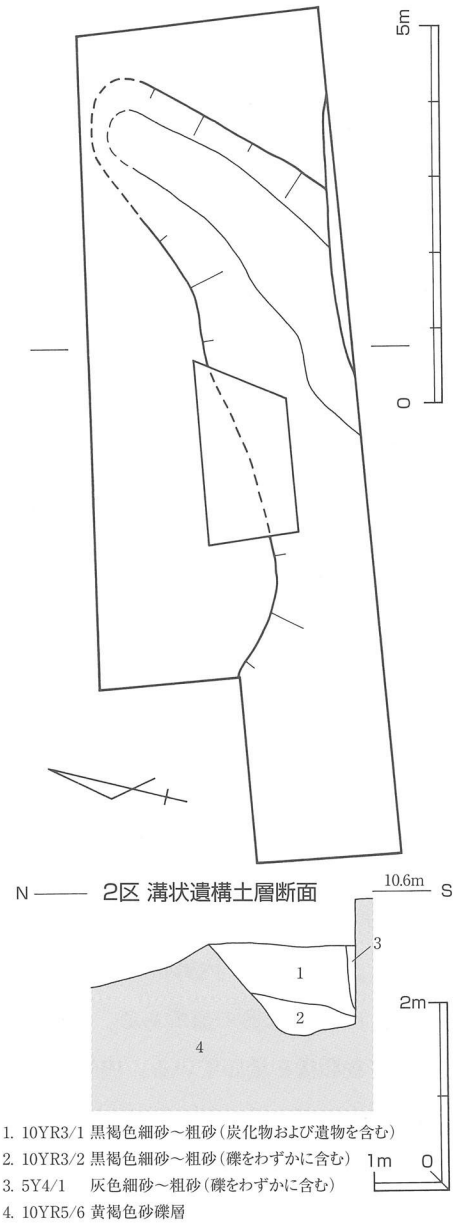
1. 攪乱土
2. 2.5Y5/4　黄褐色 極細砂～細砂
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂
4. 5Y3/1　オリーブ黒色 極細砂～細砂（炭化物および遺物を含む）
5. 5Y3/1　オリーブ黒色 極細砂～細砂
6. 10YR5/2 灰黄褐色 砂礫層



第７図　調査区全域図および南壁土層断面図

検出されたため、南西部の一部を東西約３m、南北約２m拡張（以下、南西拡張区）し、調査を進めた。調査面積は約 36 ㎡である。

調査では、耕土直下より、基盤層となる黄褐色の砂礫層（第８図　溝状遺構土層断面４層　以下、同）が確認されたが、砂礫層の検出時に、東西に緩く弧を描くような溝状の遺構が確認された（第８図）。溝状遺構は深さ約 0.4 m、東西幅約２m、長さ約 11 mを測り、南側は現行道路下へと続いていくものと考えられる。また、調査区の北壁にはその痕跡は確認されず、西側へは南西拡張区外まで続いていくが、落ち込みは浅くなっている。溝状遺構は、上下２層に黒褐色シルト混じりの砂層（１・２層　以下、黒褐色土層）が堆積しており、上層（１層）を中心に土師器の小皿・杯・壷・鍋・甕、瓦器の椀、須恵器の杯・椀・鉢・甕、土錘などの他、龍泉窯系の青磁椀が出土している。出土した土器は、完形に近いものや比較的大きな破片が多くみられ、近接する地点に遺跡の中心部が存在するものと考えられる。また、溝状遺構の土層断面の観察から、人為的な掘り込みとは考えられず、自然の落ち込み（窪地）に土器が堆積したものと考えられる。



第８図　２区　溝状遺構平・断面図

３区の調査成果

３区は東西約 13.5 m、東辺約 2.5 m、西辺約 3.5 mを測る長方形状を呈し、調査面積は約 41 ㎡である。一部に褐灰色の砂礫層（第７図　３区南壁土層断面４層　以下、同）がみられるが、耕土直下で灰黄褐色砂層の基盤層（５層）が確認され、近世以降の陶磁器片がわずかに出土している。しかし、遺構は確認されず、遺物も１・２・４区で出土している中世の時期のものは発見されなかった。

４区の調査成果

４区は東西約 16 m、南北約２mを測る東西に細長い長方形を呈し、調査面積は約 32 ㎡である。

調査では、ほ場整備による削平が及ばなかったため、基盤層であるにぶい黄褐色の砂礫層（第７図　４区南壁土層断面５層　以下、同）上に瓦器などを包含する褐灰色シルト層（３層）が全域で認められた。しかし、全体的に遺物量は少なく、小破片であり、実測、図化できるものはみられなかった。また、下層からは遺構も確認されなかった。

第２節　遺物

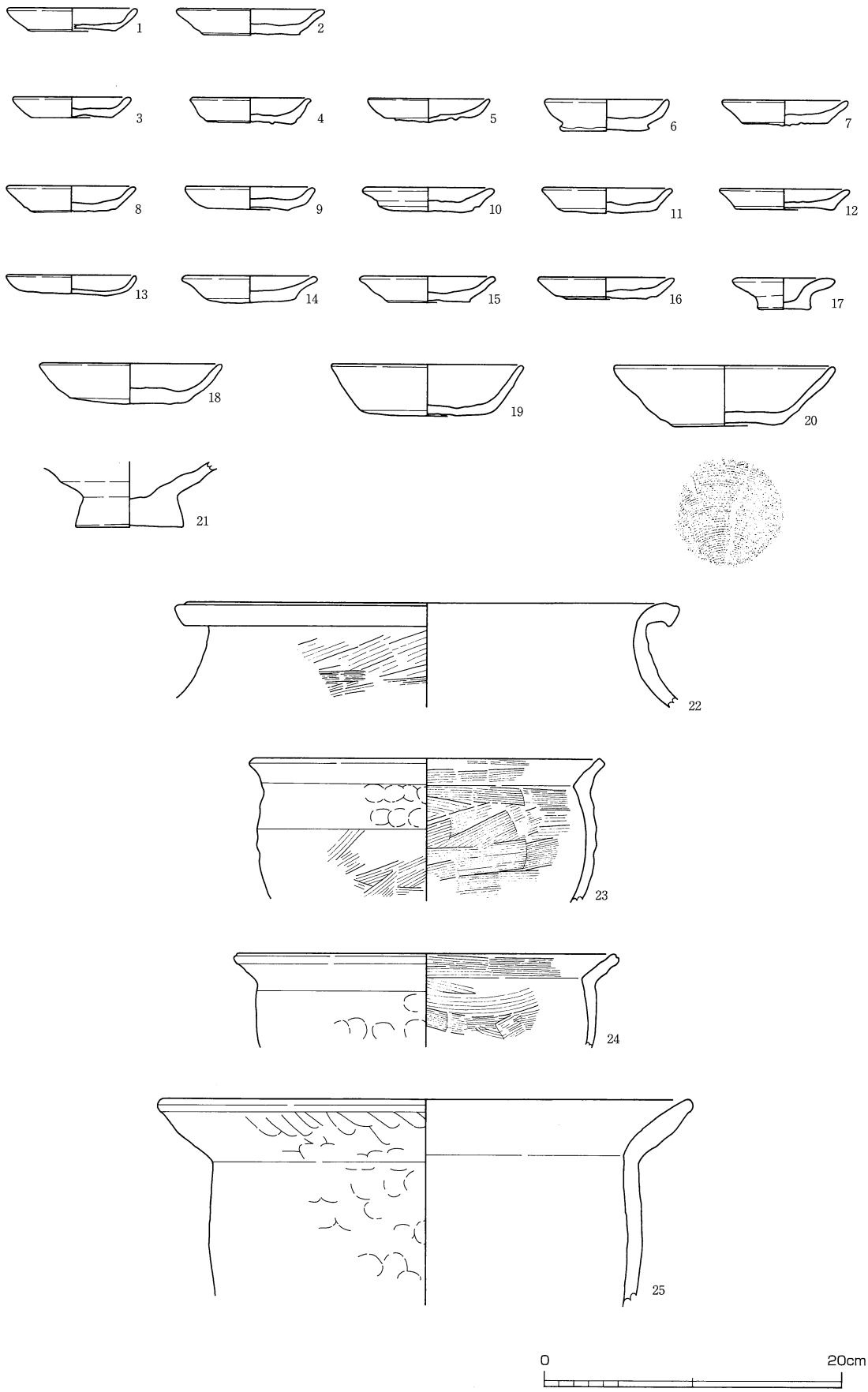
遺物の概要

今回の調査では、１区から弥生時代後期の土器が、２区および４区から鎌倉時代を中心とした時期の土器がそれぞれ出土した。しかし、１区および４区から出土した土器はいずれも小破片であり、実測することはできなかった。このため、２区の溝状遺構から出土した土器のうち、53点を実測、図化している。

２区の溝状遺構から出土した土器のうち、８点（１・２・35・36・41・48・49・51）は遺物包含層である黒褐色土層（１層）の上面から出土し、その他の45点は黒褐色土層の中位以下より出土したものである。また、南西拡張区からも５点の土器（７・13・29・47・50）が出土しており、出土層位は黒褐色土層の中位以下である。

土師器

１～16は土師器の小皿である。このうち、１・２は黒褐色土層上面から出土し、その他は中位以下から出土したものである。１点（13）を除き、轆轤成形によるもので、内外面とも回転ナデの痕跡が比較的明瞭に残っている。底部は回転ヘラ切りによって切り離しが行われ、一部（２・６・７・13・14・16）はヘラ切りののち、ナデによる調整が施されている。全体の形状は、底部から口縁部に向けて、斜め上方に直線的に立ち上がるものが多く、口径は８cm前後（約7.8cm～8.2cm）のもの（３～７）、8.5cm前後（約8.4cm～8.7cm）のもの（1・８～15）、９cm以上のもの（２・16）に分けられる。13は非轆轤成形によるもので、器壁は比較的薄く、内外面には横ナデの痕跡が残っている。底部外面は指オサエののち、ナデによる調整が施されており、丁寧なつくりである。17は口径6.9cmを測る托形の小皿である。轆轤成形によるもので、内外面とも回転ナデの痕跡が残り、底部は回転糸切りによって切り離しが行われている。18は土師器の皿である。口径約12cmを測り、底部から口縁部に向けて、斜め上方に直線的に立ち上がる形状を呈している。内外面ともに回転ナデの痕跡が残り、底部は回転ヘラ切りによって切り離しが行われている。19・20は土師器の杯である。底部から口縁部に向けて、斜め上方に立ち上がる形状は18の皿と類似するが、器高が比較的高く、杯とした。19・20ともに内外面には回転ナデの痕跡が残り、19の底部は回転ヘラ切りによって、20の底部は回転糸切りによって切り離しが行われている。また、前者の底部はヘラ切りののち、ナデによる調整が施され、後者の底部は糸切りののち、ハケによる調整が施されており、それぞれにその痕跡が残っている。21は土師器の壷の底部と考えられる。高さ約２cmの高台状の底部から斜め上方に立ち上がるわずかな部分が残存しており、全体的に摩滅によって調整は不明瞭であるが、内外面ともに回転ナデの痕跡を、底部には回転糸切りの痕跡を確認することができる。22は土師器の壷である。口縁部の小破片であるが、口径は32.3cmを測り、頸部から口縁部へは横方向に屈曲する形状を呈している。口縁部の外面および内面は、横ナデの痕跡が残り、外面はハケによる調整が施され、一部にタタキの痕跡もみられる。23・24は土師器の鍋である。ともに口縁部の小破片であるが、23は口径23.1cm、24は口径25.2cmをそれぞれ測る。やや丸みを帯びた体部から「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ23に対し、24はほぼ直線的に立ち上がる体部から口縁部へは外方向に開く形状を呈している。いずれも外面には指オサエののち、ナデによる調整が施されており、内面にも横あるいは斜め方向のナデによる調整痕が全面に残っている。25は土師器の甕である。口縁部から体部上方の約１／３が残存し、口径は35.2cmを測る。外形はほぼ直線的に立ち上がる体部から口縁部へ



第９図　２区出土遺物（1）

は外方向に開く形状を呈しており、口縁部から体部の外面には、指オサエの痕跡が広い範囲におよんでいる。口縁部内外面は横ナデの痕跡が残り、内面にはわずかに斜め方向のナデによる痕跡がみられる。

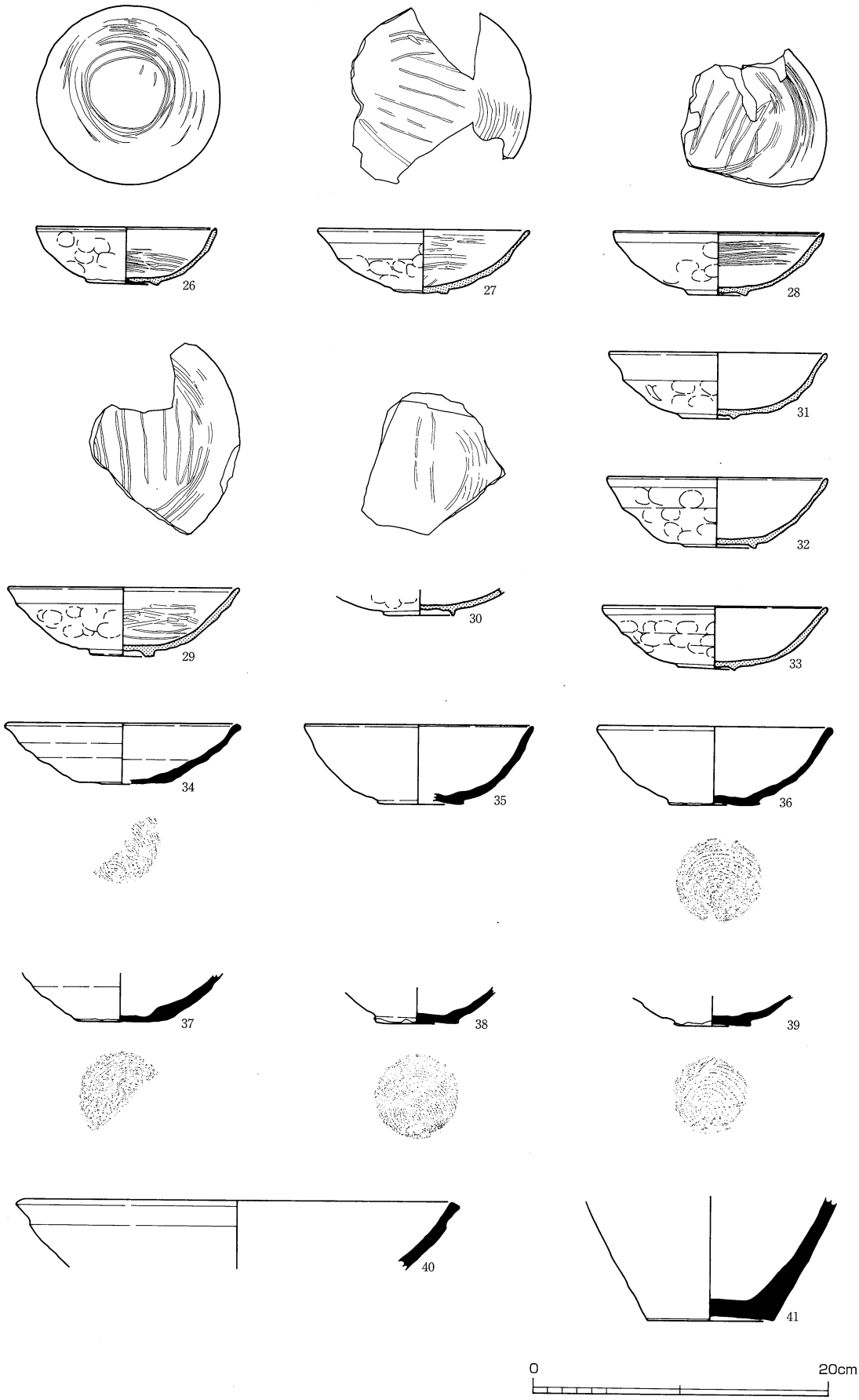
瓦器

26 ～ 33 は瓦器の椀である。26 は口径 12.2 cmを測り、後述する他の瓦器椀が口径約 14 ～ 15 cmを測ることから、やや小型のものである。貼り付け高台は断面が低い三角形状を呈し、全体の形状は底部から斜め上方に立ち上がり、やや内側に屈曲して口縁部へと至っている。外面は横方向のナデ調整が施されているが、全面に指オサエによる指頭圧痕が多く残っている。口縁部および内面の上方には横ナデが、内面の下半部には暗文が施されている。27・28 はともに口径約 14 cmを測るが、貼り付け高台は約 4 cmと小さく、断面は低い三角形状を呈している。底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する形状を呈している。外面は横方向のナデ調整が施されているが、体部過半部に指オサエによる指頭圧痕が多くみられる。27 の内面には横方向のミガキが、見込み部分には平行する 6 条の暗文が施されている。また、28 の内面にも暗文が全面的に施されており、見込み部分には「V」字状に複数の暗文が描かれている。29 は口径 15.6 cmを測り、貼り付け高台は約 4.5 cmと小さく、断面は台形を呈している。全体の形状は底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部へと至り、外面の成形および調整の状況は 27・28 と類似している。内面に施された暗文は見込み部分では平行する数条の線が描かれている。30 は底部のみが残存しており、内面の見込み部分には平行する 2 条の暗文が施されている。31 は口径 14.6 cmを測り、外形は 27 と同様、底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する形状を呈している。貼り付け高台は約 4 cmと小さく、断面は三角形状を呈している。内外面ともに摩滅によって調整は不明瞭であるが、外面下半部に指オサエによる指頭圧痕が確認される。32・33 は底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部へと至る形状を呈しており、外面には横方向のナデ調整が施されているが、体部過半部に指オサエによる指頭圧痕が多くみられる。なお、31 ～ 33 の内面にはナデによる調整痕はみられるが、暗文は施されていない。

須恵器

34 は須恵器の杯、35 ～ 36 は須恵器の椀である。34 は底部から斜め上方に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する形状を呈しており、35・36 は底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部に至る形状を呈している。いずれも内外面ともに回転ナデの痕跡が明瞭に残り、底部は回転糸切りによって切り離しが行われている。37 ～ 39 は底部からわずかに立ち上がる部分が残存するもので碗あるいは杯と考えられる。内外面には回転ナデの、底部には回転糸切りの痕跡が明瞭に残っている。40・41 は口縁部および底部の小破片であり、ともにその形状から鉢と考えられる。

42 ～ 47 は須恵器の甕の口縁部の小破片である。外面のタタキあるいはハケによる調整痕や内面のナデやあて具痕など成形上の特徴など類似する部分は多くみられるが、口縁部の形状がいずれも異なっている。42 は口径 19.6 cmを測り、体部から直線的に頸部へと至り、丸みを帯びた口縁端部は外方向に開く形状を呈している。43 は口径 23.9 cmを測り、低くほぼ垂直に立ち上がる頸部から口縁部は外方向に開き、口縁端部は下方に延びている。44 は口径 27 cmを測り、頸部から口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は上方へわずかに摘み上げられている。45 は外面が黒色を呈しており、瓦質土器の可能性も考えられる。口径は 29.8 cmを測り、器壁は他の甕に比べ、やや薄手であり、口縁部は頸部から緩やか



第10図　２区出土遺物（2）

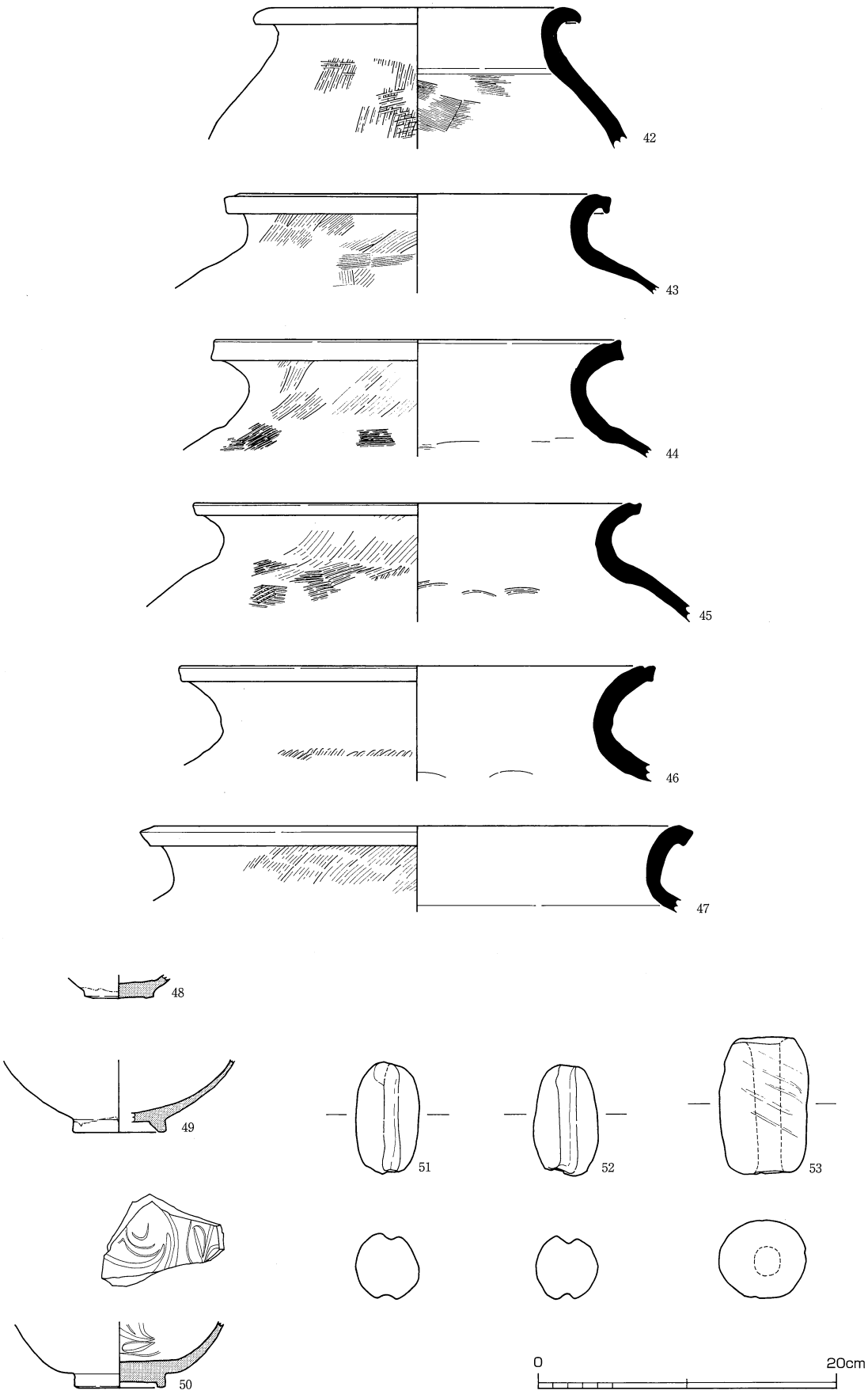
に外方向に開く形状を呈している。46は口径31.7㎝を測り、口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲している。47は口径35.2㎝を測り、頸部は外方向に直線的に立ち上がり、口縁部は短く下方に屈曲する形状を呈している。

青磁

48～50は青磁の碗である。いずれも底部の小破片であり、全体の形状は不明である。49は底部から直線的に立ち上がる形状を呈し、50は内面の見込みに花弁状の文様が描かれ、底部からやや内湾ぎみに立ち上がる形状を呈している。

土錘

51～53は土錘である。円柱形の側面に２条の溝を削り込む形状のもの（51・52）と、中央を穿孔する管状のもの（53）に分けられる。いずれも土師質で、前者が長さ約7.5㎝、後者が長さ約９㎝を測る。



第11図　２区出土遺物 (3)

第1表　遺物観察表 (1)

／　法量　（　）復元値　〔　〕残存値　単位：cm

No	種別	器　種	2区　出土層位	法量			形態および技法上の特徴	挿図No
				口径	器高	底径		
1	土師器	小皿	黒褐色土上面	(8.50)	1.55	(6.00)	約1/3残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切り。内外面とも回転ナデ。	第9図
2	土師器	小皿	黒褐色土上面	(9.60)	1.70	(6.70)	約半部残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切り、のちナデ。内外面とも回転ナデ。	第9図
3	土師器	小皿	黒褐色土	(7.75)	1.35	(5.50)	約半部残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切り、のちナデ。内外面とも回転ナデ。	第9図
4	土師器	小皿	黒褐色土	(7.80)	1.65	6.10	約半部残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切り。内外面とも回転ナデ。	第9図
5	土師器	小皿	黒褐色土	8.00	1.55	5.70	完形。轆轤成形。底部回転ヘラ切り。内外面とも回転ナデ。	第9図
6	土師器	小皿	黒褐色土	8.05	2.10	6.00	ほぼ完形。轆轤成形。底部回転ヘラ切り、のちナデ。内外面とも回転ナデ。	第9図
7	土師器	小皿	黒褐色土／南西	(8.20)	1.65	(5.70)	約半部残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切り、のちナデ。内外面とも回転ナデ。	第9図
8	土師器	小皿	黒褐色土	(8.40)	1.70	5.65	約1/3残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切り。内外面とも回転ナデ。	第9図
9	土師器	小皿	黒褐色土	8.45	1.55	5.40	約半部残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切りか。内外面とも回転ナデ。	第9図
10	土師器	小皿	黒褐色土	8.45	1.60	6.80	約半部残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切り。内外面とも回転ナデ。	第9図
11	土師器	小皿	黒褐色土	(8.45)	1.70	(6.75)	約半部残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切り。内外面とも回転ナデ。	第9図
12	土師器	小皿	黒褐色土	8.55	1.40	6.65	ほぼ完形。轆轤成形。底部回転ヘラ切り。内外面とも回転ナデ。	第9図
13	土師器	小皿	黒褐色土／南西	8.60	1.25	—	完形。轆轤未使用。底部指オサエ、のちナデ。内外面横ナデ。内面底部ナデ。	第9図
14	土師器	小皿	黒褐色土	8.65	1.80	6.10	ほぼ完形。轆轤成形。底部回転ヘラ切り、のちナデ。内外面とも回転ナデ。	第9図
15	土師器	小皿	黒褐色土	(8.70)	1.75	5.65	約半部残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切り。内外面とも回転ナデ。	第9図
16	土師器	小皿	黒褐色土	(9.00)	1.45	(6.65)	約半部残存。轆轤成形。底部回転ヘラ切り、のちナデ。内外面とも回転ナデ。	第9図
17	土師器	托形小皿	黒褐色土	6.90	2.20	3.60	完形。轆轤成形。底部回転糸切り。内外面とも回転ナデ。	第9図
18	土師器	皿	黒褐色土	(12.00)	2.70	8.00	ほぼ完形。底部回転ヘラ切り、のちナデ。内外面とも回転ナデ。	第9図
19	土師器	杯	黒褐色土	(12.60)	3.40	(9.00)	約半部残存。底部回転ヘラ切り、のちナデ。内外面とも回転ナデ。	第9図
20	土師器	杯	黒褐色土	14.55	3.95	7.50	約2/3残存。底部回転糸切り、のちハケメ。内外面とも回転ナデ。	第9図
21	土師器	壷	黒褐色土	—	〔4.40〕	(7.30)	底部のみ残存。底部回転糸切り。内外面とも回転ナデ。	第9図
22	土師器	壷	黒褐色土	(32.30)	〔7.05〕	—	口縁部の小片。外面6本1単位のハケ目および一部にタタキ。口縁部外面および内面横ナデ。	第9図
23	土師器	鍋	黒褐色土	(23.10)	(9.65)	—	口縁部の小片。外面指オサエ、のちナデおよびハケ目。口縁部内外面横ナデ。内面14本1単位の横方向のハケ目。	第9図
24	土師器	鍋	黒褐色土	(25.20)	(6.30)	—	口縁部の小片。外面指オサエ、のちナデ。口縁部外面横ナデ。内面7本あるいは12本1単位のハケ目。	第9図

第2表　遺物観察表 (2)

／　法量　（　）復元値　〔　〕残存値　単位：cm

No	種別	器　種	2区　出土層位	法量			形態および技法上の特徴	挿図No
				口径	器高	底径		
25	土師器	甕	黒褐色土	(35.20)	(13.90)	—	口縁部約1/3残存。外面指オサエ、のちナデ。口縁部内外面横ナデ。内面に斜め方向のナデ。	第9図
26	瓦器	椀	黒褐色土	12.15	3.80	4.90	完形。外面体部過半部に指オサエによる指頭圧痕、のち横ナデ。口縁部外面および内面横ナデ。内面下半部から底部にかけて暗文。	第10図
27	瓦器	椀	黒褐色土	(14.10)	4.30	3.85	約1/3残存。外面体部下半部に指オサエによる指頭圧痕、のちナデ。口縁部外面および内面横ナデ。内面一部にミガキおよび暗文。	第10図
28	瓦器	椀	黒褐色土	(14.15)	4.25	3.90	約2/3残存。外面体部下半部に指オサエによる指頭圧痕、のちナデ。口縁部外面横ナデ。内面に暗文。	第10図
29	瓦器	椀	黒褐色土／南西	(15.60)	4.65	4.30	ほぼ完形。外面体部過半部に指オサエによる指頭圧痕、のち横および不定方向ナデ。外面体部上方横ナデ。内面横ナデ、のちミガキおよび暗文。	第10図
30	瓦器	椀	黒褐色土	—	〔1.75〕	4.80	底部のみ残存。外面に指オサエによる指頭圧痕、のちナデ。内面ミガキおよび暗文。	第10図
31	瓦器	椀	黒褐色土	(14.55)	4.45	3.45	ほぼ完形。外面体部下半部に指オサエによる指頭圧痕、のちナデ。内面および外面体部上半部横ナデ、のち不定方向のナデ。	第10図
32	瓦器	椀	黒褐色土	(14.70)	4.70	4.85	約半部残存。外面体部過半部に指オサエによる指頭圧痕、のちナデ。口縁部外面横ナデ。内面摩滅により、調整不明。	第10図
33	瓦器	椀	黒褐色土	15.00	4.30	(3.75)	ほぼ完形。外面体部過半部に指オサエによる指頭圧痕、のちナデ。口縁部内外面横ナデ。内面一部指オサエ、のちナデ。	第10図
34	須恵器	杯	黒褐色土	(15.40)	4.10	(5.80)	約1/4残存。底部回転糸切り。内外面とも回転ナデ。	第10図
35	須恵器	椀	黒褐色土上面	15.30	5.40	5.85	約2/3残存。底部回転糸切り。内外面とも回転ナデ。	第10図
36	須恵器	椀	黒褐色土上面	(15.60)	5.35	6.20	約1/3残存。底部回転糸切り。内外面とも回転ナデ。	第10図
37	須恵器	椀	黒褐色土	—	〔3.20〕	6.25	底部の約半部残存。底部回転糸切り。内外面とも回転ナデ。	第10図
38	須恵器	椀	黒褐色土	—	〔2.45〕	5.75	底部のみ残存。底部回転糸切り。内外面とも回転ナデ。	第10図
39	須恵器	椀	黒褐色土	—	〔2.00〕	5.20	底部のみ残存。底部回転糸切り。内外面とも回転ナデ。	第10図
40	須恵器	鉢	黒褐色土	(18.80)	〔4.70〕	—	口縁部の小片。内外面ともに回転ナデ。内面の一部に斜め方向のナデ。	第10図
41	須恵器	鉢	黒褐色土上面	—	〔8.40〕	(8.65)	底部の約1/4残存。底部ヘラ切り、のち不定方法のナデ。内外面ともに回転ナデ。	第10図
42	須恵器	甕	黒褐色土	(19.60)	〔9.45〕	—	口縁部の小片。外面に横および斜め方向のタタキ。口縁部内外面回転ナデ。内面体部回転ナデ、のちハケ目。	第11図
43	須恵器	甕	黒褐色土	(23.90)	〔6.70〕	—	口縁部の小片。外面10本1単位のハケ目。口縁部外面および内面回転ナデ。	第11図

第3表　遺物観察表 (3)

／　法量　（　）復元値　〔　〕残存値　単位：cm

No	種別	器　種	2区　出土層位	法量			形態および技法上の特徴	挿図No
				口径	器高	底径		
44	須恵器	甕	黒褐色土	(27.00)	〔7.80〕	—	口縁部の小片。外面頸部にハケ目およびその下方に7本1単位のタタキ。口縁部外面および内面回転ナデ。内面一部にあて具痕。	第11図
45	須恵器	甕	黒褐色土	(29.80)	〔8.00〕	—	口縁部の小片。外面頸部にハケ目およびその下方にタタキ。口縁部外面および内面回転ナデ。内面一部に同心円状のタタキ。	第11図
46	須恵器	甕	灰色土	(31.70)	〔7.70〕	—	口縁部の小片。外面タタキの痕跡。頸部外面および内面回転ナデ。内面一部にあて具痕。	第11図
47	須恵器	甕	黒褐色土／南西	(35.20)	〔5.75〕	—	口縁部の小片。外面7本1単位のハケ目。口縁部外面および内面回転ナデ。	第11図
48	青磁	碗	黒褐色土上面	—	〔1.55〕	4.65	底部のみ残存。削り出し高台。内外面とも青磁釉施釉。明オリーブ灰色に発色。	第11図
49	青磁	碗	黒褐色土上面	—	〔4.95〕	(6.30)	底部の約1/4残存。削り出し高台。内外面とも青磁釉施釉。灰白色に発色。貫入有り。	第11図
50	青磁	碗	黒褐色土／南西	—	〔4.45〕	(6.60)	底部の約1/2残存。底部回転ヘラ削り。内外面とも青磁釉施釉。灰オリーブ色に発色。底部内面に花弁状文を施文。	第11図

No	種別	器　種	2区　出土層位	法量			形態および技法上の特徴	挿図No
				長さ	幅	高さ		
51	土製品	土錘	黒褐色土上面	7.55	4.25	4.40	完形。円柱状の側面に2条の溝を削り込む土錘。土師質。	第11図
52	土製品	土錘	黒褐色土	7.50	4.40	4.25	完形。円柱状の側面に2条の溝を削り込む土錘。土師質。	第11図
53	土製品	土錘	灰色土	9.20	6.00	5.35	完形。円柱状の中央を穿孔する管形の土錘。土師質。	第11図

第４章　まとめ

第１節　遺構および遺物について

今回の小田遺跡の調査は、（一）野島浦線の道路拡幅部分である幅約４～５ｍ、延長約 110 ｍの非常に細長い、限られた範囲を対象として実施した。遺構は、２区において、比較的多くの土器が出土した溝状遺構が検出された他、１区では柱穴状の落ち込みなどが複数検出されたが、調査区全域において明確な遺構は確認されなかった。しかし、溝状遺構から出土した鎌倉時代を中心とした土器は、完形に近いものが多く、また、土器の破片には摩滅の痕跡が少なかったことなどから、近接する地点、おそらく標高がわずかに高くなる北側の平坦地に、小田遺跡の中心地が存在していたものと考えられ、今回の調査区は遺跡の縁辺部に位置するものと思われる。これは、それほど大規模ではなかったと考えられるほ場整備によって、遺構が削平されたわけではなく、調査地の西側および南側をほぼ直角に流れる浦川の洪水被害を受けやすいような低地の不安定な地形環境にあり、居住域としては適さなかったためと考えられる。また、１区の西側では、比較的安定した地層（にぶい黄褐色土層）の堆積と弥生時代後期の遺物包含層（オリーブ黒色土層　出土した遺物の実測、図化はできず）が検出されたが、この時期の明確な遺構は確認されなかった。このため、弥生時代後期の集落跡は、北西に立地する南へ延びる尾根筋から続く張り出し部に存在していたと思われ、遺物はその周辺から流れ込んできた可能性が考えられる。

次に、出土した遺物をみてみると、今回実測、図化した土器は、土師器が 25 点、瓦器が８点、須恵器が 14 点、青磁および土錘がそれぞれ３点であり、あわせて 53 点を数える。これらは、明確な遺構ではないものの、溝状遺構から一括して出土した良好な資料である。

土師器は、小皿が 16 点（１～16）ともっとも多く、その他に杯、壷、鍋などがみられる。小皿類は口径８cm前後（約 7.8 ～ 8.2 cm）のもの、8.5 cm前後（約 8.4 ～ 8.7 cm）のもの、９cm以上のものに分類されるが、形態あるいは轆轤による成形など技法上の特徴に類似する点が多く認められる。瓦器は８点（26 ～ 33）すべてが椀であり、１点（26）を除き、口径約 14 ～ 15 cmを測り、外面に指オサエの痕跡が明瞭に残っている。底部に高台を貼り付け、内外面ともに回転ナデあるいは内面にミガキや暗文を施すなど、その形態および成形上の特徴は類似しており、淡路島出土の瓦器椀に多く確認されている和泉型瓦器椀の特徴を有している。また、外面にヘラミガキが施されておらず、器高は４cm前後を測り、法量の縮小がみられる和泉型Ⅲ -3 期に分類され、13 世紀初頭頃のものと考えられる。しかし、瓦器椀の内外面の色調は、須恵器の様相を呈する灰オリーブ色などの色調が多くみられ、須恵器と同様の技法で焼成された可能性が考えられる。須恵器は杯、椀、鉢、甕が出土しているが、土師器や瓦器などとは異なり、いずれも破片である。その中で、６点が出土している甕（42 ～ 47）は、口縁部の形態は異なるものの、その形状から概ね 12 世紀後半から 13 世紀中頃に位置するものと考えられる。また、一部に口縁端部を上方に摘み上げる形態のものがみられ、明石海峡を隔てた当時の一大窯業地である魚住古窯跡群（明石市魚住町）で生産された製品の可能性が考えられる。この他、青磁あるいは土錘が出土していることから、淡路島の地理的特徴ともいえる海上による他地域との交流や、漁業に関連する集落の状況が垣間見られる。

以上のことから、小田遺跡において集落が営まれたのは、出土した瓦器椀あるいは須恵器の甕の口縁

部の形態などから、鎌倉時代を中心とした12世紀後半～13世紀中頃（中世前期）と考えられ、淡路地域のこの時期の特徴的な集落の一端を伺わせる遺跡であったと思われる。また、近接する北側丘陵上には、向殿館跡や正井館跡などの中世城館の存在が周知されており、小田遺跡を含む周辺一帯では、中世前期から活発な交流が始まっていたものと想像される。

第2節　小田遺跡の範囲とその後の調査について

（一）野島浦線の道路改良工事における小田遺跡の調査は、4区の東側については、確認調査（平成11年6月）および今回の調査成果、さらには標高が低くなっていくことなどから、遺構の存在する可能性は極めて低いと判断され、調査は行わなかった。しかし、1区の西側については、その後、平成15年4月に分布調査、平成17年6月に確認調査が実施されており、その概要を記載し、小田遺跡の範囲および周辺の状況について考えてみたい。

分布調査　今回の調査地点の西側（第12図）を踏査し、土師器・須恵器・陶磁器片を採取した。

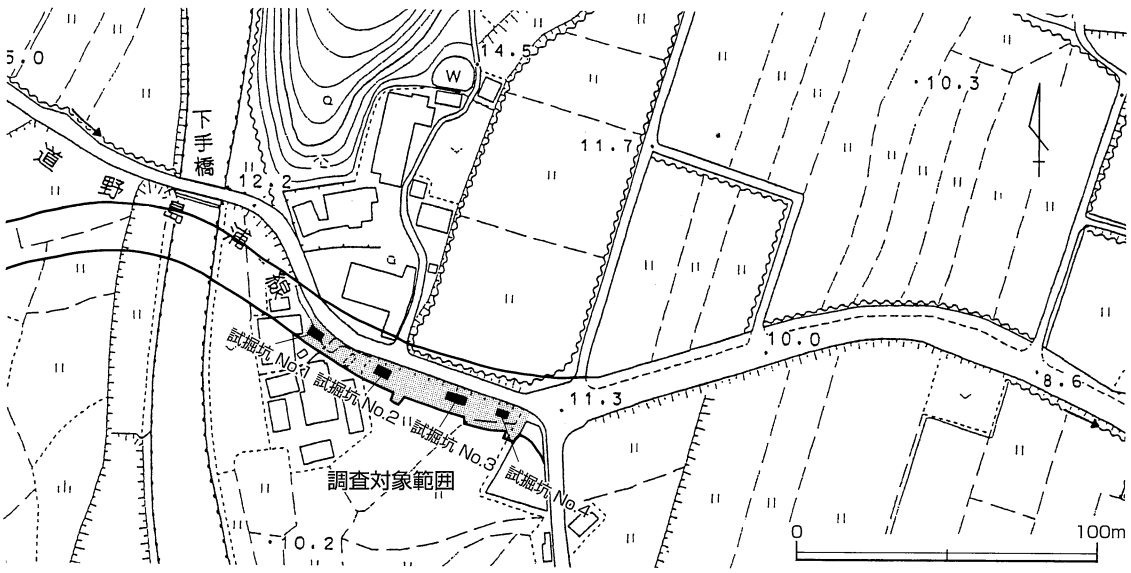
遺跡調査番号　2003067

調査担当者　　調査第1班　別府洋二・鐵　英記

調査期間　　平成15年4月23日

調査面積　　約400㎡

確認調査　分布調査の結果をうけ、4ヵ所の試掘坑を設定（第12図）し、調査を実施した。調査では、1区で確認された比較的安定したにぶい黄褐色土層の堆積が4ヵ所の試掘坑すべてで確認されたが、遺構は検出されなかった。また、試掘坑2・3より、古代末から中世前期と考えられる土師器および須恵器片が出土している。



第12図　平成15・17年度　調査対象範囲および試掘坑配置図

遺跡調査番号　2005120
調査担当者　　調査第１班　西口圭介
調査期間　　平成17年６月２日
調査面積　　20㎡

今回の調査区西側で行われた平成17年６月の確認調査では、１区で確認されたにぶい黄褐色土層の堆積がすべての試掘坑から確認され、一部に遺物の出土も報告されている。しかし、遺構は検出されず、試掘坑４から試掘坑３へと地形は緩やかに傾斜し、再び試掘坑１の西側へと標高はわずかに高くなるため、浅い谷地形の部分を調査したものと考えられている。また、出土した遺物は土師器および須恵器の小破片で、総じて著しい摩滅が認められ、周辺から流入したものと判断されている。このため、小田遺跡は（一）野島浦線を境にして、前節で指摘したように調査区北側の平坦地一帯を中心とした範囲に広がっていたものと考えられる。

小田遺跡は以前、ほ場整備に伴い確認調査が実施され、中世の遺物が出土したと報告されているが、限られた調査のため、遺構は確認されなかった。今回の道路拡幅工事によって、新たに調査を行う機会が得られたが、繰り返すように、遺跡の中心地を発掘しておらず、十分な成果は得られなかった。淡路縦貫道建設に伴う調査で発掘された旧東浦町内の藤ノ木遺跡や管松原遺跡などとともに、中世の小規模な遺跡については、今後、周辺に開発が計画された時には、十分な注意が必要と思われる。

報 告 書 抄 録

ふりがな	こだいせき
書名	小田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第287冊
編著者名	仁尾一人
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　TEL　078-531-7011
発行年月日	西暦2006（平成18）年３月17日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
小田遺跡（こだいせき）	兵庫県（ひょうごけん） 淡路市（あわじし） 浦（うら）	2888150	990160 990206	34度 32分 20秒	134度 59分 5秒	確認調査 990616～ 990617 本発掘調査 990901～ 990909	16㎡ 171㎡	道路改良事業 （野島浦線）

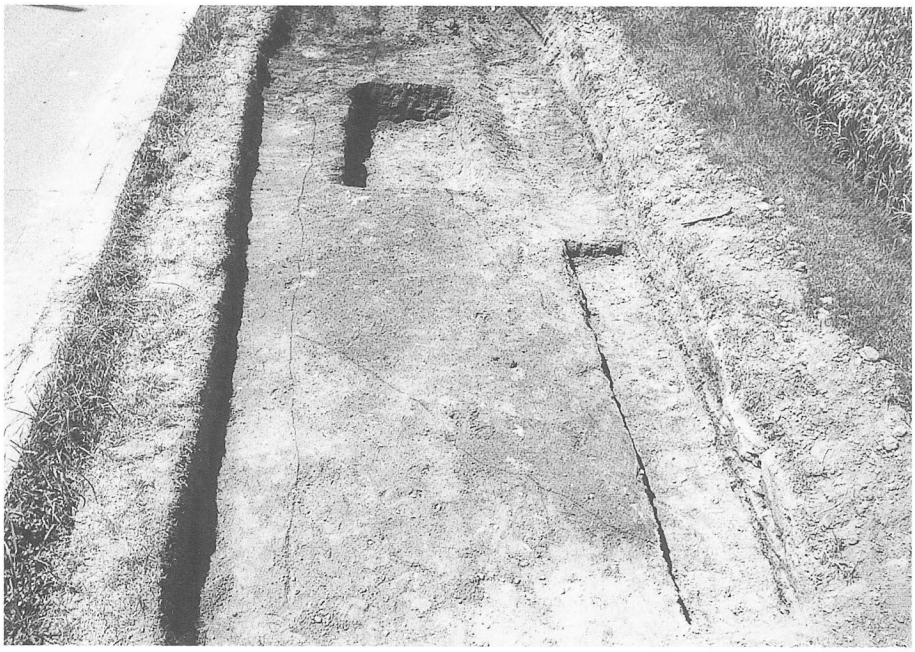
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小田遺跡	集落跡	鎌倉時代	溝状遺構	土師器・瓦器 須恵器・青磁	特になし

写真図版

調査前状況
（西から）

１区　全景
（東から）

１区　南壁土層断面
（北西から）



２区　溝状遺構検出状況
（東から）

２区　溝状遺構完掘状況
（東から）

２区　南壁土層断面
（北東から）

２区　溝状遺構土層断面
（西から）

２区　溝状遺構遺物
取り上げ状況
（南から）

３区　南壁土層断面
（北東から）

調査状況（西から）

小田遺跡および佃遺跡
の現況（西から）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

写真図版６

２区　出土遺物(2)

18

19

20

25

22

23

21

24

26

31

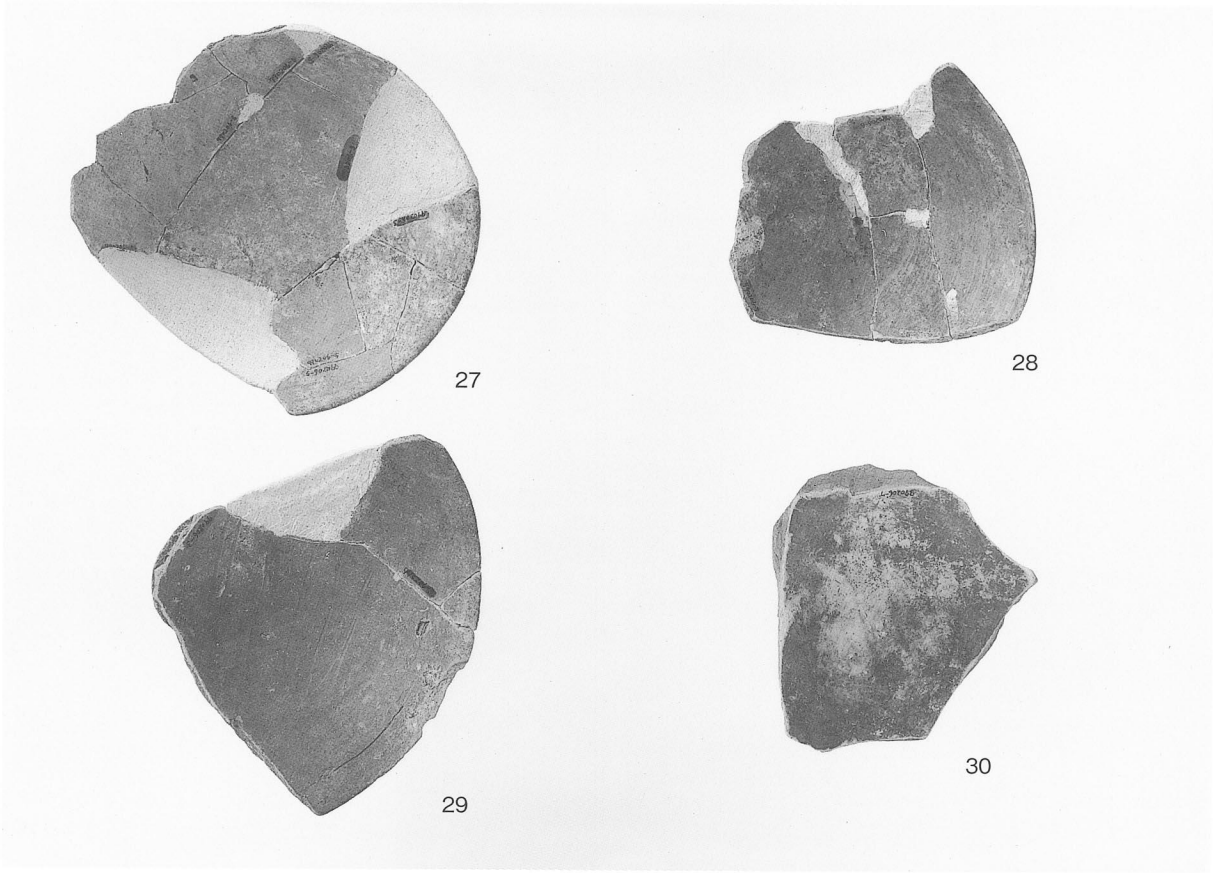
32

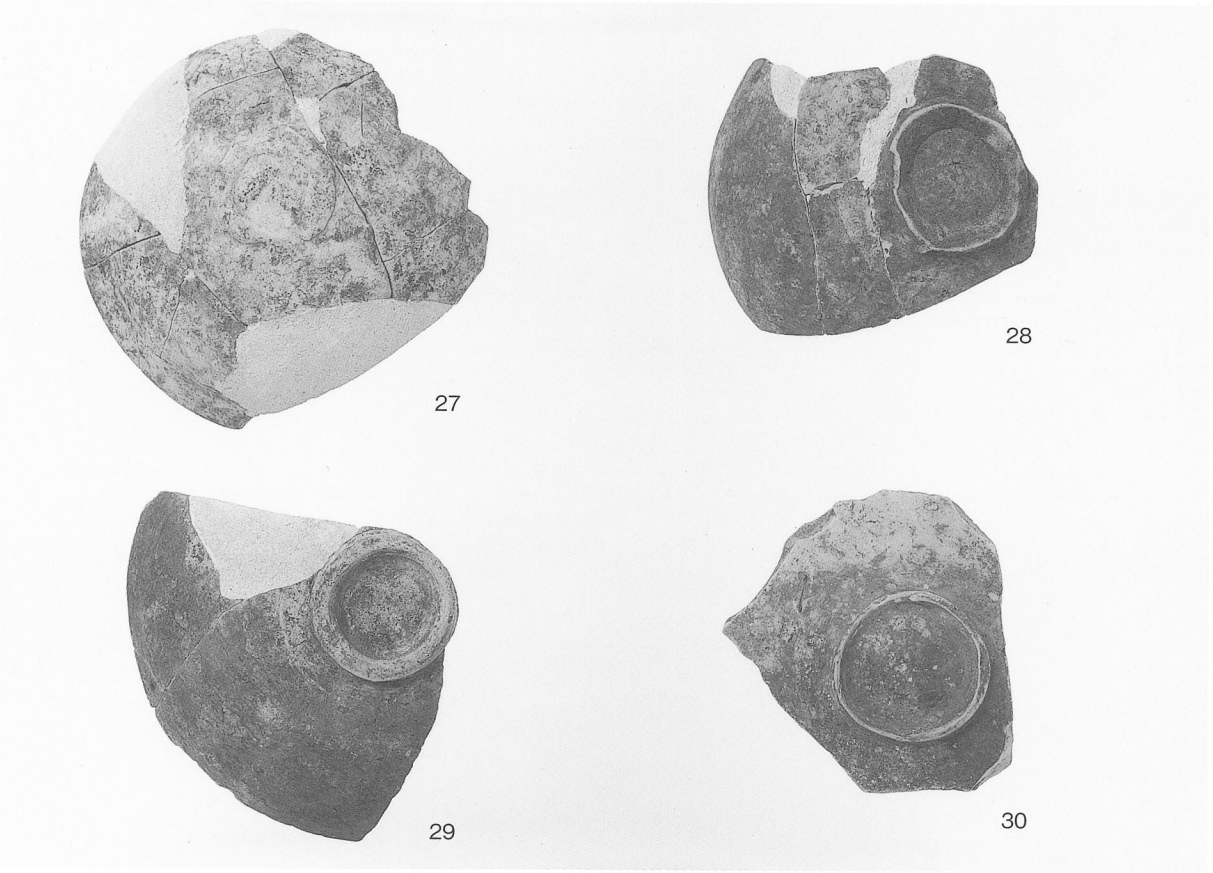
33

34

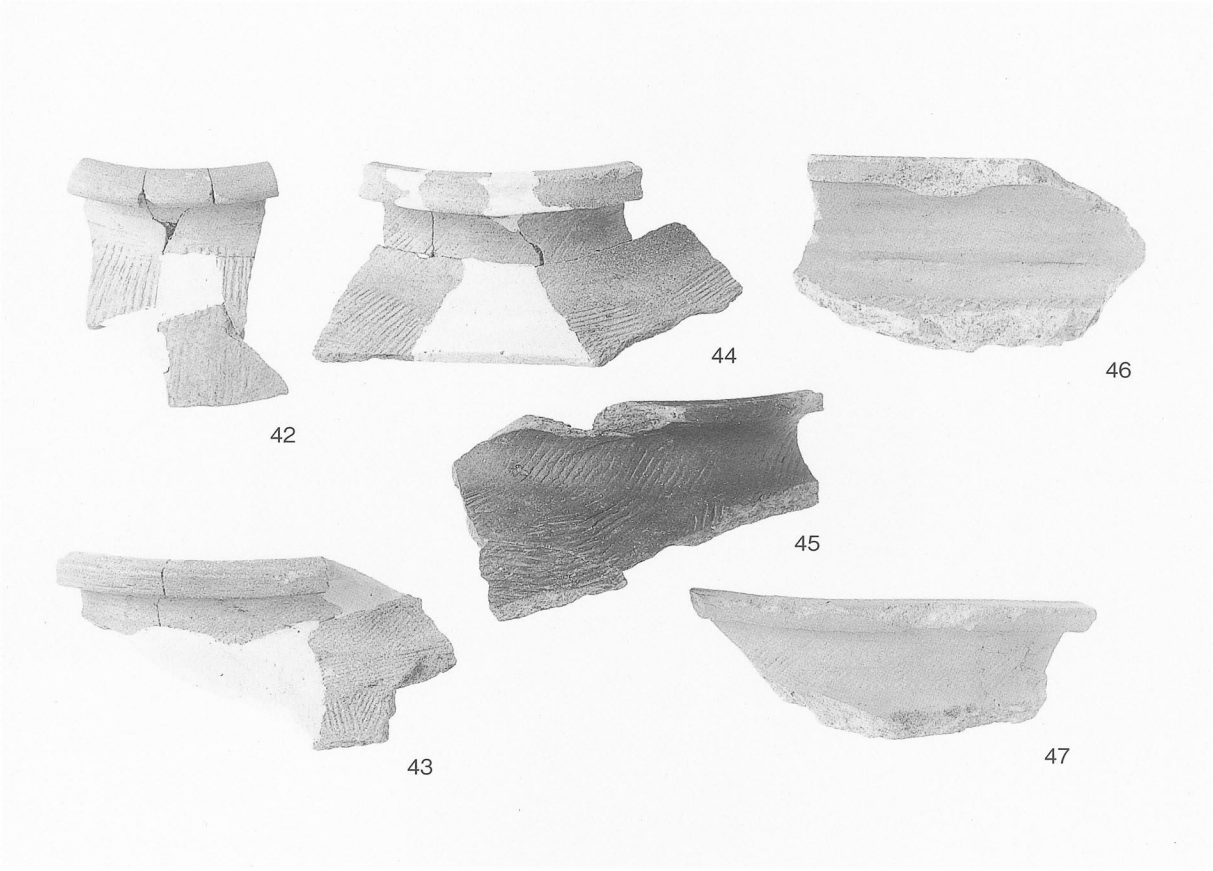
写真図版８

２区　出土遺物(4)



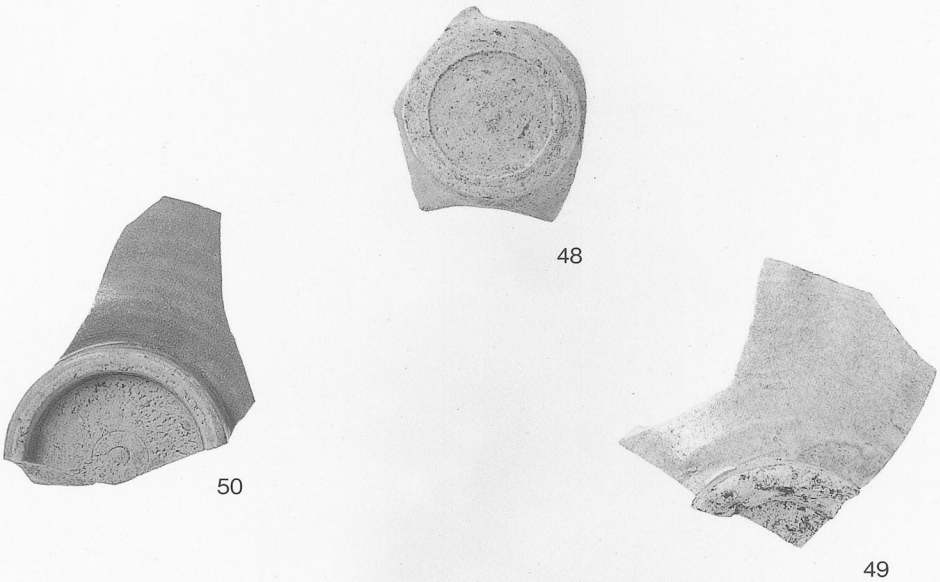


35
37
38
40
36
39
41


42
44
46
45
43
47

写真図版 10

２区　出土遺物(6)



兵庫県文化財調査報告　第287冊

小　田　遺　跡

－道路改良事業（野島浦線）に伴う発掘調査報告書－

平成18年３月17日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５

発　行　兵庫県教育委員会

〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１

印　刷　ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39